九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

17ー19世紀、東アジアにおける漂流問題研究

邢, 万里

https://doi.org/10.15017/2545095

出版情報：九州大学東洋史論集. 46, pp.1-18, 2019-03-29. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：

17－19世紀、東アジアにおける漂流問題研究

邢　　万　里

はじめに

近世東アジアの漂流問題については、すでに明治時代から、江戸時代の漂流記の整理や刊行が進められ、その後も日本では、日本人の海外漂流記録を中心に多くの研究が発表されてきた。さらに1980年代以降になると、日本人漂流民のみならず、中国人・朝鮮人漂流民を対象とする研究も増加し、また日本だけではなく、中国語圏においても漂流問題に関する研究が活発化しつつある。

漂流問題をめぐる研究史については、戦前には吉岡永美による研究史整理があり(1)、戦後には加藤貴の「日本近世漂流関係文献目録」が、1990年代までの研究をリストアップしている(2)。また日中間の漂流問題に関しては、劉序楓が日本語文献を中心に関連史料と研究成果を紹介し(3)、孟暁旭も漂流民に関する研究史を概観している(4)。ただし東アジア諸国間の漂流問題に関して、日中双方の研究史を総合的に紹介した研究史整理はなされていない。

このため本稿では、17世紀中葉の清朝成立から19世紀にかけての日本・中国・朝鮮・琉球における漂流問題に関して、日中双方における関連史料の刊行状況と主要な研究文献を紹介し、現段階における研究成果を概観することにしたい。ただし漂流問題に関する刊行史料や研究文献はあまりに多数であるため、1970年代以前の文献については、特に代表的な成果を紹介するにとどめ、1980年代以降の文献についても、個別の漂流事例に関す

（1） 吉岡永美『漂着船物語の研究』（白林書房、1944年）。
（2） 加藤貴『漂流奇談集成』（国書刊行会、1990年）。
（3） 劉序楓「漂流・漂流記・海難」（桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店、2008年）。
（4） 孟暁旭『漂流事件与清代中日関係』（中国社会科学出版社、2010年）。

る事例研究は特に重要な論著だけを紹介することにしたい。また近年では、韓国においても漂流研究が増加しているが、本稿では和訳された文献を紹介するにとどめる。欧文による研究も紹介できなかった。また日本人のロシアやアメリカなどへの漂流事例に関する研究成果も多いが、これらのアジア以外への漂流に関する論著も、本書では扱わないこととする。

一、漂流関係史料の刊行状況

東アジア諸国の漂流記録については、各国に多くの史料が残されている。加藤貴は明治以降に日本で刊行された漂流記の網羅的な文献目録を作成しており(5)、劉序楓は各国に所蔵されている漂流関係史料を紹介し(6)、それらの内容を分類・整理している(7)。本節ではこれらの研究も参照して、東アジア諸国の漂流関係史料と、それらの刊行状況を概観しておきたい。

江戸時代、漂流記は主に写本によって伝えられたが、『北槎聞略』や『環海異聞』など、各種の関連文献を参照して、学者により刊行された漂流記もあった(8)。江戸後期から明治初期にかけて、日本社会では海外の情報への関心が高まり、学者たちも、漂流記の史料価値に注目し、それらを外交史料集や地誌に取り入れた。田辺茂啓が明和４（1767）年に編集した『長崎志』には、第12巻「日本ヨリ異国渡海之部」に唐船により送還された日本人の記事を収録し(9)、林復斎が嘉永６（1853）年に編纂した『通航一覧』には、各国部の最後にその地に関連する漂流記録を収録する(10)。外務省記録局が明治17（1884）年に編集した『外交志稿』の「漂流編」も、地域ごとに漂流関係史料を節録している(11)。

明治末期から昭和初期にかけて、漂流記の研究を精力的に進めたのが石井研堂である。彼は1900年に33種の漂流記を『校訂漂流奇談全集』として

（5） 加藤前掲『漂流奇談集成』。
（6） 劉序楓前掲「漂流・漂流記・海難」。
（7） 劉序楓「中国現存的漂海記録及其特徴」（『島嶼文化』40輯、国立木浦大学島嶼文化研究院、2012年）。
（8） 桂川甫周編、亀井高孝校『北槎聞略』（三秀舎、1939年）。大槻玄沢『環海異聞』（叢文社、1976年）。
（9） 田辺茂啓編、古賀十二郎校『長崎志』（長崎文庫刊行会、1928年）。
（10）林復斎編『通航一覧』（清文堂、1967年）。
（11）外務省記録局編『外交志稿』（外務省、1884年）。

出版し[12]、1927年にも、その他の漂流記18種を『異国漂流奇譚集』として出版した[13]。さらに戦後には、山下恒夫が石井研堂の二編著に若干の新たな漂流記を追加して再刊し[14]、荒川秀俊や池田皓も多数の漂流記を刊行している[15]。いうまでもなく、未刊行の写本ははるかに多い。服部純一の『日本人漂流記文献目録』には、写本と刊本をあわせて、1000種類以上の漂流関係史料を列挙している[16]。さらに1980年代からは、大庭脩や松浦章が日本に漂着した中国船に関する記録を、『江戸時代漂着唐船史料集』（既刊10冊）として刊行している[17]。

また1990年代からは、中国や台湾でも漂流に関する檔案文書の刊行が進みつつある。『清代中国与東南亜各国関係檔案史料彙編：比律賓巻』には、ルソンの難船に関する記録を多く含む[18]。マカオ関係では、『中葡関係檔案史料匯編』、『澳門問題明清珍檔薈萃』、『明清時期澳門問題檔案彙編』などの史料集に、漂流記録が散見する[19]。朝鮮については『清代中朝関係史料匯編』・『清代中朝関係史料続編』に[20]、琉球については『清代中琉関係檔案』（全８編）に漂流関係史料が含まれており[21]、ベトナムについては、『古代中越史料選編』に漂流記録が散見する[22]。劉序楓はこれらの清朝檔案所収の海難記録を、未刊行史料も含めて網羅的に列挙しており[23]、尹全

---

(12) 石井研堂編『校訂漂流奇談全集』（博文館、1900年）。
(13) 石井研堂編『異国漂流奇譚集』（福永書店、1927年）。
(14) 山下恒夫再編『石井研堂コレクション　江戸漂流記総集』（日本評論社、1992年、1993年）。
(15) 荒川秀俊編『異国漂流記集』（吉川弘文館、1962年）。池田皓編「漂流」（『日本庶民生活史料集成』第５巻、三一書房、1968年）。
(16) 服部純一編『日本人漂流文献目録』（同志社大学図書館、1984年）。
(17) 大庭脩・松浦章・薮田貫編『江戸時代漂着唐船資料集』１～10（関西大学出版部、1986～2018年）。
(18) 中国第一歴史檔案館編『清代中国与東南亜各国関係檔案史料匯編』第２冊（国際文化出版公司、1998年）。
(19) 中国第一歴史檔案館編『中葡関係檔案史料匯編』（中国檔案出版社、2000年）。中国第一歴史檔案館編『澳門問題明清珍檔薈萃』（澳門基金会、2000年）。中国第一歴史檔案館・澳門基金会・暨南大学古籍研究所編『明清時期澳門問題檔案匯編』（人民出版社、1999年）。
(20) 中国第一歴史檔案館編『清代中朝関係檔案史料匯編』（国際文化出版公司、1996年）。『清代中朝関係檔案史料続編』（中国檔案出版社、1998年）。
(21) 中国第一歴史檔案館編『清代中琉関係檔案』（全８編）（中華書局・黄山書社・中国檔案出版社、1993～2009年）。
(22) 中国社会科学院歴史研究所古代中越関係資料選編編輯組編『古代中越関係資料選編』（中国社会科学出版社、1982年）。

海は『清実録』所収の雍正～道光年間に台湾海峡で発生した海難記事を整理している(24)。

さらに清朝檔案のほかにも、朝鮮の『朝鮮王朝実録』、『同文彙考』、『備辺司謄録』、琉球の『歴代宝案』、『中山世譜』、『琉球王国評定所文書』にも、多くの漂流記録が残されており、ベトナムの『大南寔録』にも漂流記事が散見する(25)。なお中国では、これらの官撰史料以外に残された漂流関係史料はきわめて少なく、劉序楓によると、現存する比較的完全な史料は三つしか確認されていないという(26)。彼はその原因として、中国においては海外情報への関心が全体的に低かったことを指摘している(27)。

二、戦前から1970年代までの日本人漂流民研究

明治時代には、漂流記の刊行とともに、それらの漂流記を用いた研究も進められていった。特に日本の朝鮮・満洲進出により、満鮮史研究が活発化するなかで、学界の注目を集めたのが、清初に満洲に漂着した日本人による『韃靼漂流記』であった。特に内藤湖南は、『韃靼漂流記』や松前商人の満洲漂流記を紹介し、『韃靼漂流記』により清初政権の実態を検討し、そこに記された満洲の地名を考証している(28)。また稲葉君山も漂流問題を通じて、日本と朝鮮の清初政権に対する外交態度の相違について論じた(29)。さらに園田一亀は、『典客司謄録』・『承政院日記』などの朝鮮側の史料や、

(23) 劉序楓『清代檔案中的海難史料目録』(中央研究院人文社会科学研究中心、2004年)。
(24) 尹全海『清代渡海巡台制度研究』(九州出版社、2007年)。
(25) 桃木至朗「東南アジア史における漂流の研究は可能か――漢籍とチャンパ・ベトナム史の事例から」(『前近代東アジアにおける海域交流成立条件に関する基礎的研究』、2000年)。孫宏年「清代中越海難互助及其影響略論 (1644～1885)」(『南洋問題研究』、2001年2期)。黄錚・蕭徳浩主編『中越辺界歴史史料選編』(社会科学文献出版社、1992年)。許文堂・謝奇懿編『大南実録清越関係史料彙編』(中央研究院東南亜区域研究計劃、2000年) の中にも海難史料が残されている。
(26) 王雲五編『安南伝、安南雑記、安南紀遊』(『叢書集成初編』3256、商務印書館、1937年)。鄭光祖『一斑録』(沈雲竜編『近代中国史料叢刊』文海出版社、2003年)。蔡廷蘭『海南雑著』(『臺湾文献叢刊』第42種、臺湾銀行経済研究室、1959年)。
(27) 劉序楓前掲「中国現存的漂海記録及其特徴」、64～65頁。なお朝鮮では、李志恒『漂舟録』(日朝協会愛知県連合会、1993年) など、文人の手になる若干の漂流史料も残されている。池内敏『近世日本と朝鮮漂流民』(臨川書房、1998年) 参照。
(28) 内藤湖南「日本満洲交通略説」(初出1907年、『東洋文化史研究』光文堂、1942年に収録)。
(29) 稲葉君山『清朝全史』(早稲田大学出版部、1914年)。

漂流民の墓碑・過去帳など日本側史料も駆使し、『韃靼漂流記』に関する総合的な研究を行っている(30)。

また戦前には、「鎖国」下における漂流民を最初に世界を見た人々として注目し、彼らのもたらした海外情報について論じた研究も多く発表された(31)。石井研堂は江戸時代における漂流記の刊行禁止について検討し、漂流記の学術研究上の価値についても論じている(32)。また井野邉茂雄は、漂流民の帰国後の待遇を分析し、幕府は漂流民の知識見聞を軽視しがちであったと説いている(33)。

さらに戦前には、日本の南洋進出と南洋史研究の進展を背景として、南海方面への漂流事例の研究も進められ(34)、漂流記により東南アジアの民族の風俗、民族移動、南方海域の地理を検討した学術的研究も現れた。清野謙次は太平洋沿岸の漂流記を取り上げ、潮や風など自然状況と漂流との関係を論じた。彼は東南アジアのみならず、ハワイや千島列島に関する漂流記も取り上げ、当地の民族とその風俗について考察している(35)。また吉岡永美は漂流と風向や潮の流れとの関係、漂流者帰還の方法などについて検討し、彼らの開拓精神を称揚した(36)。

このように戦前の研究では、漂流民を鎖国体制下において海外情報をもたらした先駆者として評価する場合が多い。しかし敗戦後は、対外研究史の退潮とともに漂流記への関心も急速に衰え、1950年代までは関連する研究も乏しかった。ようやく1960年代にいたり、各種の漂流記を総合的に分析する研究が現れるようになる。川合充彦・荒川秀俊・相川広秋は多くの漂流記を紹介し、近世における漂流問題を通史的に論じ、漂流中の生活、

---

(30) 園田一亀『韃靼漂流記の研究』(初出1939年、復刊『韃靼漂流記の研究』平凡社、1991年)。
(31) 朝日新聞社『開国文化史料大観』(朝日新聞社、1929年)。白柳秀湖『偉人全伝』第12巻(改造社、1932年)。大森三平『海に生きる勇者』(東栄社、1942年)。竹内尉『海とその先駆者』(健文社、1943年)。
(32) 石井研堂「漂流譚雑筆」(『異国漂流奇譚集』福永書店、1927年)617〜623頁。
(33) 井野邉茂雄「漂民帰国後の待遇」(初出1924年、『幕末史の研究』雄山閣、1927年に収録)。
(34) 南条文雄、高楠順次郎『仏領印度支那――一名、仏国日南の新領土』(文明堂1903年)。中村弼『太平洋大観点』(中外印刷、1920年)。海軍有終会編『太平洋2600年史』(海軍有終会、1943年)。南方産業調査会編『南進叢書第15巻ハワイ諸島』(南進社、1944年)。
(35) 清野謙次「江戸時代に於ける太平洋漂流記録」(太平洋協会編『太平洋の海洋と陸水』(太平洋圏学術書3)、岩波書店、1943年)。清野謙次(『太平洋に於ける民族文化の交流』創元社、1944年)。
(36) 吉岡前掲『漂着船物語の研究』。

漂流民の帰還の方法、海外見聞、近世海運・航海術・造船技術と漂流の関係などについて検討した[37]。また鮎沢信太郎は鎖国時代の日本漂流民が見た海外情報や外国への帰化について論じている[38]。これらの研究は、多数の事例を通じて、日本人の海外漂流を全体的に叙述しているが、どちらかといえばロシアやアメリカへの漂流に重点が置かれている。

一方で漂流民による中国の見聞に関する研究も進められた。実藤恵秀は中国関係の漂流記を収集し、漂着地や送還ルートを検証するとともに、彼らの中国での見聞や中国観などを紹介した[39]。佐藤三郎は漂流民の海外漂流について概説し、江戸後期にロシア及びアメリカへ漂着した漂流民による西洋の見聞が開国の内部要素の一つとして作用したのに対し、中国への漂着の場合、開国への寄与は比較的少なかったが、救助された漂流民の中国に対する親近感が両国の関係を深めたと論じている[40]。

さらに1970年代になると、池野茂・金指正三・岡田信子らにより、より広い史料収集により、新たな視角から漂流問題を論じた研究が進められていく[41]。それまでの研究は『通航一覧』などの日本側史料を中心としており、そのため日本人漂流民を対象とする研究が圧倒的に多かった。しかし1970年代後半からは、日本以外の漂流記を利用する研究も増加していく。

池野茂は『中山世譜』に記載された琉球船・中国船・朝鮮船の遭難漂流記録を整理し、漂流発生の原因・船員の自助努力・船の構造などの問題について検討を加え、琉球へ漂着した中国・朝鮮船について、漂流者の人数・生存率・船籍・航海の目的などを検証している。また金指正三は法制史の見地から、近世における海難救助に関する法令を紹介し、日本に漂流した外国船、特に朝鮮船と中国船の救助について論じた[42]。さらに岡田信子は

（37）川合彦充『日本人漂流記』（社会思想社、1967年）。荒川秀俊『日本人漂流記』（人物往来社、1964年）。相川広秋『日本漂流誌』（『日本漂流誌』刊行会、1967年）。
（38）鮎沢信太郎『漂流 ── 鎖国時代の海外発展』（至文堂、1966年）。
（39）実藤恵秀「漂流記にあらわれた中国」（初出1951年、『近代日中交渉史話』春秋社、1973年に収録）。
（40）佐藤三郎「江戸時代に於ける日本人の海外漂流 ── 中国漂着の場合を中心として」（初出1957年、『近代日中交渉史の研究』吉川弘文館、1984年に収録）。
（41）池野茂「沖縄「山原」船水運の歴史地理的考察」（『地域と交通』大明堂、1975年）。「近世琉球の遭難漂流記録をめぐる諸問題」（『桃山学院大学社会学論集』10巻1号、1975年）。金指正三『近世海難救助制度の研究』（吉川弘文館、1968年）。岡田信子「近世異国漂着船について ── 特に唐・朝鮮船の処遇」（『法政史学』26号、1974年）。
（42）金指前掲『近世海難救助制度の研究』。

近世の異国船、特に唐船・朝鮮船に対する救助政策について論じ、救助の手続きと経費の負担について検討を加えている(43)。

三、1980年代以後の研究（一）：漂流民送還問題

1980年代以降、日本では海域アジア史研究が次第に活発化し、その中で日本・中国・朝鮮・琉球など国家の境界を越えて移動する人々や情報伝達が注目され、鎖国・海禁体制下で国境を越えて移動した漂流民に対する関心も高まっていった。そのなかでも特に活発に研究が進められたのが漂流民送還問題である。鎖国・海禁体制下で、日本と中国のように直接的な外交関係がない国家間でも、相互に漂流民の保護・送還体制が形成されており、これらの研究を通じて、その形成と運用の実態が明らかにされていった。また台湾や中国においても、2000年代から海域アジア史研究への関心が高まり、同様の問題関心から、漂流民送還問題についての研究が進められていった。

まず漂流民送還研究を先駆的に進めたのが荒野泰典である。荒野は近世の東アジアに成立していた漂流民送還体制を、日本を中心に検討した。そして、近世日本における漂流民送還体制成立のために、必要とされる条件を分析した。一つ目の条件は、国内において、国家権力が対外関係を統制する体制が存在することである。もう一つの条件は、国家が相互に漂流民送還を実現するための国際関係が存在することである。そのうえで、荒野は日朝・日琉・日中の間の漂流民送還の具体的な手続に詳細な検討を加えた(44)。

一方、春名徹は荒野の研究では中国の漂流民送還制度が看過されていると指摘し、清朝の檔案史料を検討して、東アジアの漂流民送還体制は中国を中心として成立し、運用されていたと論じた(45)。また劉序楓は清朝の檔案史料とともに、日本・琉球・朝鮮史料も併用して、東アジア海域諸国に

(43) 岡田前掲「近世異国漂着船について」。

(44) 荒野泰典「近世日本の漂流民送還体制と東アジア」（『近世日本と東アジア』東京大学出版会、1988年）。

(45) 春名徹「近世東アジアにおける漂流民送還体制の形成」（『調布日本文化』４号、1994年）。「近世東アジアにおける漂流民送還体制の展開」（『調布日本文化』５号、1995年）。「漂流民送還制度の形成について」（『海事史研究』52号、1995年）。「近世日本船海難にかんする中国全記録の再検討 ── 東アジアにおける近世漂流民送還制度と日本」（『海事史研究』62号、2005年）。「近世漂流民送還制度の終焉」（『南島史学』65・66号、2005年）。

よる外国人漂流民の救助・送還制度の実態を検討し、18世紀半ば以降に東アジアにおける漂流民送還ネットワークが形成されたと指摘している(46)。

さらに松浦章は近世東アジア諸国における海難救助と、中国帆船が東アジア海域においての漂流民送還に果たした役割を検討した。松浦は日本・朝鮮・琉球は漂流民の送還方法として、基本的に清朝と同様に海難に遭遇した人々を救助し、本国に送還する方法を取っており、清朝を中心として東アジアの漂流民送還体制が形成されていたと指摘している。また松浦は中国の海難救助政策は人道的な配慮によるものだけではなく、皇帝の権威を築くという意図にも基づいており、こうした意識も、日本・朝鮮・琉球の海難救助に影響を与えていたと説いている(47)。

また、松浦章は唐船によって送還された日本漂着ベトナム漂流民を通じて、中国帆船が漂流民送還に重要な役割を果たしたことを指摘し、その原因を中国帆船の性能が朝鮮や日本の帆船よりも優れており、また清朝の展海令以降、東アジア海域を自由に航行することが可能となったことに求めた。その結果、東アジア海域では漂流民がほとんど中国帆船によって送還され(48)、中国における沿海航運業の発達にともない、日本漂流民も短期間に帰国できるようになったと論じた(49)。

さらに黒木国泰は17世紀から18世紀までの漂流民送還体制の変動について考察し、明清交代期において、日本は朝鮮・琉球を含む小中華帝国システムを形成し、その一つの象徴が、朝鮮と琉球に漂着した漂流民を、全て日本を通じて本国に送還するという体制であったと説いている。しかし鄭氏勢力の滅亡後、清朝を中心とする環シナ海朝貢システムが成立するとと

---

(46) 劉序楓「清代環中国海域的海難事件研究 ── 以清日両国対外国難民的救助及遣返制度為中心　1644～1861」(『中国海洋発展史論文集』８輯、中央研究院中山人文社会科学研究所、2002年)。「清代環中国海域的海難事件研究 ── 清朝嘉慶年間、琉球・呂宋に漂着した朝鮮人の帰国事例を中心に」(福建師範大学閩台区域研究中心編『第９届中琉歴史関係国際学術会議論文集』海洋出版社、2005年)。「清代檔案与環東亜海域的海難事件研究 ── 兼論海難民遣返網絡的形成」(『故宮学術季刊』23巻３期、2006年)。

(47) 松浦章「近世東アジア海域諸国における海難救助形態」(『関西大学東西学術研究所紀要』40号、2007年)。

(48) 松浦章「中国帆船による漂流民の本国帰還」(『東アジア文化交渉研究別冊』８号、2012年)。松浦章「唐船により中国に送還された日本漂着ベトナム人」(『東アジア文化交渉研究』５号、2012年)。

(49) 松浦章「清代沿海帆船に搭乗した日本漂流民」(初出2006年、『近世東アジア海域の文化交渉』思文閣、2010年に収録)。

もに、清朝を中心とした送還体制が成立し、日本と中国の漂流民送還体制が共存することになったという[50]。

このような東アジア全体における漂流民送還体制に関する研究とともに、各国における漂流民救助体制に関する研究も多い。日本における漂流民への救助については、前述の荒野泰典の研究は全体的に論じている。また日本に漂着した唐船の救助に関しては、中村質は唐船漂着事例を通じて、唐船の長崎回送と長崎奉行所による経費負担を分析し[51]、黒木国泰は日向への漂着唐船を中心に一連の論文を発表し、漂着唐船の情報伝達、送還、および幕末の唐船回送について詳論している[52]。

さらに個別の唐船漂着事例については、特に日本人と唐船乗員との筆談記録を利用した研究が多い。大庭脩、松浦章などが編集した『江戸時代漂着唐船史料集』（既刊10冊）では、史料の翻刻とともに、漂着唐船の乗員、積荷および送還ルートなどについても考察している[53]。また田中謙二は文政９（1826）年遠州榛原郡下吉村（現静岡県榛原郡吉田町）に漂着した中国寧波商船得泰船に対する筆談記録である『得泰船筆語』に詳細な訳注を附し、関連地名や人物、引用された中国古典や詩文などを考証している[54]。菰口治も福岡藩に漂着した唐人と日本人との筆談記録『大島筆語』に訳注を付し[55]、吉村淑甫は漂流民と日本の漢学者との筆談記録により、土佐に漂着した中国船の救助と長崎への護送について考証した[56]。

さらに1980年代以後は、日朝間の漂流民送還の研究も進展している。池

(50) 黒木国泰「漂流・漂着船史料からみた17・18世紀環シナ海地域システムと鎖国体制」（『宮崎女子短期大学紀要』25号、1999年）。

(51) 中村質「漂着唐船の長崎回送規定と実態」（九州大学国史研究室編『近世近代史論集』吉川弘文館、1997年）。

(52) 黒木国泰「安政２年折生迫漂着江南沙太壽商船について ── 上・下 ── 近世日向漂着唐船史料の紹介」（『宮崎女子短期大学紀要』21号・22号、1995〜1996年）。「近世日向漂着唐船情報の伝達・管理システム」（『宮崎女子短期大学紀要』26号、2000年）。「延岡内藤藩の幕府領細嶋漂着唐船対処マニュアルについて上・下」（『宮崎女子短期大学紀要』27号・28号、2001〜2002年）。「安政２年高鍋藩漂着唐船護送日記上・下」（『宮崎女子短期大学紀要』29号・30号、2003〜2004年）。「幕末期における日向漂着唐船と海防体制 ── 高鍋藩史料を中心に」（『宮崎学園短期大学紀要』１号、2008年）。「日向漂着唐船研究終章」（『宮崎学園短期大学紀要』９号、2016年）。

(53) 大庭・松浦・薮田前掲『江戸時代漂着唐船資料集』１〜10。

(54) 田中謙二「得泰船筆語訳注」（初出1986年、『田中謙二著作集』第３巻、汲古書院、2001年に収録）。

(55) 菰口治「節田家蔵稿本『大島筆語』訳注」（『九州文化史研究所紀要』1994年）。

内敏は日朝間において生じた漂流事件を詳細に調査し、特に日本に漂着した朝鮮人の送還手続きおよび日本の朝鮮語通訳などについて検討した(57)。李薫は朝鮮時代の日朝間の漂流民の発生と送還を検討し、漂流民送還の実務を担った対馬藩と朝鮮との外交交渉の実態を分析して、日朝間の相互送還体制が近代的な韓日関係へと移行する過程についても論じた(58)。

また、日本では沿岸各地に中国や朝鮮からの漂流民が漂着しており、それらに関する事例研究も枚挙にいとまがない。ここでは朝鮮や中国の漂流民が多く漂着した山口県に関して、代表的な成果を紹介しておこう。まず吉積久年は山口県文書館所蔵の毛利家文庫を中心史料として、近世に長州に漂着した中国船の数を整理した(59)。また池内敏・岸浩・木部和昭は山口県内に所蔵されている地方史料を活用して、漂着した朝鮮人の送還政策を検討し、また朝鮮語通詞が一時的に存在したことを明らかにした(60)。さらに河村克典は朝鮮漂流民の取り調べのために作成した朝鮮図とそこに附された記事を紹介している(61)。

一方、中国の漂流民救助政策に関しては、前述の春名徹の研究が全体的に論じている。また徐恭生も『大清会典事例』と檔案史料に基づいて、清代における漂流民救済制度の成立と変遷について論じ(62)、湯熙勇は台湾で遭難した外国船への略奪事件を紹介し、それらの事件をめぐる清朝との交渉、略奪が発生した原因、清朝側の法律的対応などを分析した(63)。

---

(56) 吉村淑甫「文政10年漂着「江南船」送届始末」(『高知の研究』第６巻、清文堂1982年)。
(57) 池内敏『近世日本と朝鮮漂流民』(臨川書店、1998年)。
(58) 李薫『朝鮮後期漂流民と日朝関係』(法政大学出版局、2008年)。
(59) 吉積久年「近世、長州唐船の記録」(前掲『近世近代史論集』)。
(60) 池内敏「天明４年長州悪党漂民一見」(『日本歴史』545号、1993年)。岸浩「長門北浦に漂着した朝鮮船の記録」(『山口県地方史研究』53号、1985年)。「長門北浦に漂着した朝鮮人の送還――唐人おくり」(『山口県地方史研究』54号、1985年)。「長門沿岸に漂着した朝鮮人の送還を巡る諸問題の検討」(『朝鮮学報』119・120号、1986年)。木部和昭「朝鮮漂流民の救助・送還にみる日朝両国の接触」(『史境』26号、1993年)。「近世期における朝鮮漂流民と民衆――長門・石見地域の比較を中心に」(『山口県史研究』４号、1996年)。
(61) 河村克典「朝鮮漂着民との関連で作成された朝鮮図」(『山口文書館研究紀要』24号、1997年)。
(62) 徐恭生「清代海上漂風難民拯済制度的建立和演変」(『第８回琉中歴史関係国際学術論文集』琉中歴史関係国際学術会議実行委員会、2001年)。
(63) 湯熙勇「清代台灣的外籍船難與救助」(『中國海洋發展史論文集』７輯下册、中央研究院中山人文社會科學研究所、1999年)。

また日本漂流民の救助問題については、春名徹と荒野康典の研究のほか、劉序楓が中国に漂着した日本難船への救助を全体的に論じており(64)、劉斐・劉恒武も乍浦などに漂着した日本人に対する救助活動について検討を加えた(65)。また中国に漂着した琉球人に対する救助についても多くの研究の蓄積がある。楊彦傑は琉球人の台湾漂着事例を集め、琉球漂流民が台湾に漂流した原因、清朝の漂流民に対する救済政策、及び漂流民が実際に受けた救助について考察した(66)。上江洲安亨は台湾に漂着した琉球漂流民が殺された事件に関して、清朝当局が琉球人を殺害した現地の住民の逮捕や、行方不明になった琉球人の捜索に積極的に対応しなかったことを指摘した(67)。田名真之は、乾隆時代に中国へ漂着した琉球船の隻数、出帆地、漂着地、中国の救助状況を明らかにするとともに(68)、琉球船の中国漂流事件について、存留通事の使命、送還に対する賞銀および琉球館と衙門との交渉などを検証した(69)。赤嶺守も清朝による琉球漂流民に対する救助と送還、特に加賞について論じている(70)。

朝鮮における漂流民救助に関しては、松浦章が『備辺司謄録』所収の「問情別単」を利用し、漂流民の身分と救助措置について詳しく検討した(71)。

---

(64) 劉序楓「従清朝対日本海難難民的遣返来看清代中日関係(1644～1861)」(『何石金昌洙教授華甲記念史学論集』汎友社、1992年)。

(65) 劉斐・劉恒武「清代浙江沿海対日本漂流民的救助与遣返」(張偉編『浙江省海洋文化与経済』海洋出版社、2009年)。

(66) 楊彦傑「台湾歴史上的琉球難民遭風案」(『福建論壇』2001年3期)。

(67) 上江洲安亨「清朝期における台湾での琉球漂流民遭難事件について」(前掲『第8回琉中歴史関係国際学術会議論文集』)。

(68) 田名真之「琉球船的漂流・漂着 ── 以乾隆期的事件為例」(前掲『第8回琉中歴史関係国際学術会議論文集』)。

(69) 田名真之「存留通事の職と使命 ── 乾隆11年の漂着事件の処理をめぐって」(『第5回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』沖縄県教育委員会、1999年)。

(70) 赤嶺守「清代の琉球漂流民送還体制について ── 乾隆25年の山陽西表船の漂流事例を中心に」(『東洋史研究』58巻3号、1999年)。「清代の琉球漂流民に対する賞賚品について」(『日本東洋文化論集:琉球大学法文学部紀要』6号、2000年)。「清代福州における琉球漂着民の撫恤について ── 加賞を中心に」(『第7回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』沖縄県立図書館、2004年)。

(71) 松浦章「朝鮮国漂着中国帆船の「問情別単」について」(初出1984・1985年、『清代帆船沿海航運史の研究』関西大学出版部、2010年に収録)。「清代江南沙船の航運記録 ── 江南商船の朝鮮漂着」(初出1985年、『清代上海沙船航運業史の研究』関西大学出版部、2004年に収録)。

劉海萌は山東船の朝鮮漂着と朝鮮側の救助について論じ[72]、糟谷政和は17世紀に朝鮮に漂着した中国船の送還について、送還ルートおよびその手続きを考察した[73]。また赤嶺守は朝鮮に漂着した琉球漂流民への撫恤政策について論じた[74]。また漂着事件を通して清朝と朝鮮の関係について論じた研究として、屈広燕は宗藩体制の下で、清朝の商船と沿岸地域管理が朝鮮の漂着船の救助に関わったことを示し、朝鮮の漂着船の救助政策は清朝の海洋管理の延長であったと指摘した[75]。

琉球王国における漂流民救助体制については、長森美信が天理大学所蔵の『増補耽羅志』を中心として、1739年に琉球へ漂着した朝鮮人康世善など21人の漂流事件を分析した[76]。李国栄は雍正朝の中琉漂流船相互救助の事例を通して、宗藩関係のもとで相互救助が実現されていたことを指摘している[77]。また豊見山和行は、琉球の漂流民への対処方法は江戸幕府による切支丹禁止と密貿易の予防政策とともに、中国の漂流民への救助政策にも影響されていたと説き[78]、琉球は日本と中国の二つの漂流民救助体制の接点に置かれていたと論じた[79]。また豊見山は宝永元（1704）年に薩摩藩から首里王府へ布達された漂流民処理に関する命令を分析し、琉球外交が一定の主体性を有していたと指摘した[80]。

渡辺美季も琉球の異国船漂着に対する政策の形成に検討を加え、琉球は琉日関係を中国に隠蔽する政策をとっていたが、一方的に薩摩に従ってい

(72) 劉海萌「清代山東漁船の朝鮮漂着について」（『文化交渉：東アジア文化研究科院生論集』５号、2015年）。

(73) 糟谷政和「17世紀末朝鮮に漂着した中国漂流民の送還規定について」（『茨城大学人文学部紀要：人文コミュニケーション学科論集』４号、2009年）。

(74) 赤嶺守「朝鮮に漂着した琉球漂流民の送還について ── 清代中国の送還システムに見る撫恤事例」（『琉球アジア文化論集：琉球大学法文学部紀要』３号、2017年）。

(75) 屈広燕「朝鮮西海域清朝難船情況初探（1684～1881）」（『清史研究』2018年２期）。

(76) 長森美信「1739年朝鮮漂着民が見た琉球 ── 天理大学付属図書館所蔵『増補耽羅志』の漂流関係記録をめぐって」（『南島史学』68号、2006年）。

(77) 李国栄「雍正朝における中琉漂流船相互救助について」（前掲『第５回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』）。

(78) 豊見山和行「近世琉球における漂流・漂着問題について ── 漂着民救護制度を中心」（前掲『第８回琉中歴史関係国際学術論文集』）。

(79) 豊見山和行「琉球列島海域史研究序説 ── 研究史の回顧と二、三問」（『琉球大学教育学部紀要』68号、2006年）。

(80) 豊見山和行「17世紀における琉球王国の対外関係 ── 漂流民の処理問題を中心」（藤田覚編『17世紀の日本と東アジア』山川出版社、2000年）。

たわけではなく、日清の支配秩序の矛盾を調整するために、時には中国人・朝鮮人漂着民への処置に関して、組織的に日本の指示に反する処置を執る場合もあったと説いている(81)。なお孫宏年は清朝とベトナムとの難船の相互救助について検討し、その救助行為は一般民衆の自発的な行為であったと論じた(82)。

なお清朝の礼部は、朝鮮国王や琉球国王に対し、対等の官僚機関の間で使われる文書である咨文を取り交わしていたが、非朝貢国の日本に対しても、1751～1767年までの間、漂流民送還に際して、海防同知の名義で「日本国王」に咨文を送っていた。これに対し、日本側は長崎鎮府の名義で回咨し、咨文の年号の「大清乾隆」に対して、「大日本宝暦」で回咨している。こうした漂流民送還をめぐる咨文往復状況は、劉序楓・春名徹・孟暁旭の研究により明らかにされている(83)。

四、1980年代以後の研究（二）異文化交流に関する研究

1980年代以後、東アジア海域史研究の活発化にともない、国境を越えた情報や文化の伝播に関する関心も高まっており、最近では特に朝鮮・ベトナム使節の『燕行録』、朝鮮通信使の記録、『華夷変態』などの史料を通じて、東アジアにおける情報伝達や文化交流に関する研究が進められている。その代表として、夫馬進・沈玉慧による『燕行録』と朝貢使節の研究(84)、池内敏による朝鮮通信使の研究(85)、郭陽による『華夷変態』を使った中国に関する情報の研究があげられる(86)。

---

(81) 渡辺美季『近世琉球と中日関係』（吉川弘文館、2012年）。
(82) 孫宏年前掲「清代中越海難互助及其影響略論（1644～1885）」。
(83) 劉序楓「近世中国と日本間における漂流・漂着事件について」（『東アジア海域における交流の諸相 —— 海賊・漂流・密貿易』九州大学21世紀COEプログラム（人文科学）、2005年）。春名前掲「近世東アジアにおける漂流民送還体制の形成」、「近世東アジアにおける漂流民送還体制の展開」、「漂流民送還制度の形成について」。孟暁旭前掲『漂流事件与清代中日関係』。
(84) 夫馬進『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』（名古屋大学出版会、2015年）。沈玉慧「清代における朝貢使節の相互交流と情報収集 —— 朝鮮燕行使を中心としてみた」（九州大学博士論文、2013年）。
(85) 池内敏『絶海の碩学 —— 近世日朝外交史研究』（名古屋大学出版会、2017年）。
(86) 郭陽「明清交替期の東アジア海域と華人海商 ——『華夷変態』を中心として」（九州大学博士論文、2014年）。

それとともに漂流民を通じた文化や情報の伝達や、また漂流民による対外認識と漂流民の記録が知識人にいかなる影響を与えたかという問題を、複数の漂流記によって検討した研究も進展しつつある。たとえば大庭脩は中国人漂流民と日本儒者との筆談、日本漂流民が見た中国風景など、漂流民を通じた日中文化交流を概観した(87)。また春名徹は各国の漂流記の記述の相違を論じ、日本に漂着した朝鮮人は日本の文化や風俗に関して詳しい記録を残したが、日本や琉球に漂着した中国人が、日本文化について記録することは稀であったと指摘している(88)。

また漂流記により日本人の中国認識を論じた研究として、相田洋は漂流民が中国国内で見た「纏足」「弁髪」などの風俗を考察し(89)、劉序楓は中国江南に漂着した薩摩の漂流民に関する漂流記と図像史料を検討し、日本人と中国文人との交流、琉日関係の隠蔽にも論及した(90)。小林郁は1789年に広東に漂着した松前船松栄丸に関する漂流記を整理し、漂流民の身分と漂流経緯を詳論し、広東と乍浦の風景、乍浦の商人、現地の習俗、地元住民との交流などについて論じている(91)。

日本人の東南アジア認識については、八百啓介がボルネオへの漂流記が近世日本の東南アジア観に与えた影響について説き(92)、倉地克直はフィリピンに漂着した神力丸の漂流記録により、漂流民の異国交流について検討した(93)。また池内敏は日本・ベトナム間の漂流民は東・東南アジアに広がった中国商船のネットワークによって相互に送還されたことを示すとともに、漂流記録により日本文化とベトナム文化の共通性・相違性についても考察し(94)、吉開将人は大乗丸のベトナム漂流記録を利用して1800年前後

(87) 大庭脩『漂着船物語』(岩波書店、2000年)。

(88) 春名徹「漂流民の世界」(尾本恵市編『海のアジア５　越境するネットワーク』岩波書店、2001年)。

(89) 相田洋「近世漂流民と中国」(『福岡教育大学紀要』31号、第二社会科編、1981年)。

(90) 劉序楓「清代における日本人の江南見聞 ── 薩摩船の漂流記録『清国漂流図』を中心として」(『川勝守・賢亮博士古稀記念　東方学論集』汲古書店、2013年)。

(91) 小林郁『松栄丸「広東」漂流物語 ── 近世奥羽人の遭難と異文化体験の記録』(無明舎、2015年)。

(92) 八百啓介「江戸時代における東南アジア漂流記 ──『南海紀聞』とブルネオ情報」(『日本歴史』687号、2005年)。

(93) 倉地克直『漂流記録と漂流体験』(思文閣、2005年)。

(94) 池内敏「近世日本人のベトナム認識ノート」(木村汎編『日本・ベトナム関係を学ぶ人のために』(世界思想社、2000年)。

のベトナムの政治変動について論じた[95]。

朝鮮人の日本漂着については、倉地克直が備前船の朝鮮漂流と津軽船の朝鮮漂流とを比較し、両者の朝鮮社会への順応の違いを明らかにし[96]、池内敏は薩摩藩士の『朝鮮漂流日記』を紹介・検討し、薩摩藩士と朝鮮の地方官が相互理解を深める姿勢が窺えると説いた[97]。なお神宮滋は秋田領民の海外漂流に関する記録を網羅的に収録し、書誌学的検討を加えている[98]。

朝鮮人の海外漂流については、河宇鳳が官員や僧侶など朝鮮知識人の漂流記を利用し、近世朝鮮人の日本認識について論じ[99]、池内敏は朝鮮の学者が朝鮮漂流民李志恒の『漂舟録』により、蝦夷地の情報を紹介したことを指摘した[100]。また劉序楓は東アジアにおける漂流民送還制度が未確立であった時期の朝鮮人の琉球漂流事例を通して、朝鮮人の中国・琉球・日本認識を考察し[101]、范金民は浙江に漂着した朝鮮人崔斗燦の『乗槎録』により、朝鮮人と浙江文人との交流を紹介している[102]。さらに多和田真一郎は、琉球とルソンに漂着した朝鮮人文淳得の『漂海録』を翻刻し、詳細な訳注を附し、そこに記された琉球・呂宋の言語についても分析した[103]。

中国漂流民の海外見聞については、劉序楓が近世日中間の漂流事件を概観し、日中間の政治・貿易・文化交流などを広く論じ[104]、藪田貫は日本に漂着した唐船の救助と送還を通じて、中国人と日本人との交流について詳論した[105]。李晨楠・梁佳麗も中国船の漂着記録を通じて、日本人儒者の中

---

(95) 吉開将人「江戸時代漂流民と「安南国王」阮福映 ── 漂流記から読み解くベトナム史」細田典明編『旅と交流 ── 旅からみる世界と歴史』(北海道大学出版会、2015年)。

(96) 倉地克直『近世日本人は朝鮮どうみていたか ──「鎖国」のなかの「異人」たち』(角川選書、2001年)。

(97) 池内敏『薩摩藩士朝鮮漂流日記』(講談社、2009年)。

(98) 神宮滋『秋田領民漂流物語』(無明舎、2006年)。

(99) 河宇鳳「漂着朝鮮人の日本認識」(青柳正規編『日本海学の新世紀２ ── 環流する文化と美』角川書店、2002年)。

(100) 池内敏「異文化情報源としての漂流記」(前掲『日本海学の新世紀２』)。

(101) 劉序楓「清代前期の朝鮮と琉球 ── 朝鮮人の琉球漂着記録を中心に」(『第12届中琉歴史関係国際学術会議論文集』北京図書出版社、2009年)。

(102) 范金民「朝鮮人眼中的清中期中国風情 ── 以崔斗燦『乗槎録』為中心」(『史学集刊』2009年３期)。

(103) 多和田真一郎『「琉球・呂宋漂海録」の研究 ── 200年前の琉球呂宋の民俗・言語』(武蔵野書院、1994年)。

(104) 劉序楓「「鎖国」体制下における日中交流 ── 漂流・漂着船を通して」(辻本雅史・劉序楓編『鎖国と開国 ── 近世日本の内と外』台大出版中心、2017年)。

国認識を考察し(106)、王振忠は日本に漂着した中国画家方済が描いた日本の風景画や、方済と日本文人との交流を紹介している(107)。また葛兆光は中国人と日本人との筆談記録によって、日本人が清国を蕃夷と見なす意識を有していたことを指摘した(108)。

このほか鄒然は朝鮮官員と中国人漂流民との会話を記録した「問情別単」により、漂流民の朝鮮認識と朝鮮の海外情報収集について検討を加え(109)、林佳慧はベトナムへ漂着した中国知識人蔡廷蘭の『南海雑着』を紹介し、そこではベトナムの地理や風俗が詳記されており、『奉使安南日記』や『安南使事紀要』などの中国使節の記録と比べ、異文化に対する関心が強いと指摘した(110)。

また2000年以後、漂流民と地元民との筆談記録により、言語伝播を検討した研究も発表されている。木津裕子は漂流民と琉球官吏・通事との問答を記録した『白姓官話』により、八重山士族が中国人漂流民に官話を学んだ事実を明らかにした(111)。松浦章も『白姓官話』の成立の背景と経緯を紹介し(112)、17～19世紀に朝鮮に漂着した中国人との筆談記録に現れる語彙についても考察している(113)。岑玲は、中国に漂着した琉球民間船について、言語が通じない状況下での意思疎通や琉球への送還方法を詳細に分析した(114)。

さらに漂流記録により海上貿易の実態を検討した研究として、松浦章は中国漂着琉球船に関する檔案史料から中国茶葉の琉球流入を分析するとと

(105) 薮田貫「漂着唐船と近世日本 ── もう一つの日中関係史」（『日本近世の可能性』校倉書房、2005年）。
(106) 李晨楠『江戸時代中国漂流民筆談文献研究』（浙江工商大学修士論文、2015年）。梁佳麗『宝暦３年八丈島漂着南京船研究』（浙江工商大学修士論文、2015年）。
(107) 王振忠「中国漂流民筆下的富士山」（『日出而作』三聯書店、2010年）。
(108) 葛兆光「漸行漸遠 ── 清代中葉朝鮮、日本与中国的陌生感」（『書城』2004年９期）。
(109) 鄒然『備辺司謄録与中国漂流民』（浙江工商大学修士論文、2014年）。
(110) 林佳慧『蔡廷蘭〈海南雑着〉研究』（国立中興大学修士論文、2012年）。
(111) 木津裕子「「官話」の漂着 ── 乾隆年間八重山における「官話」の伝播」（『東と西の文化交流』関西大学出版部、2004年）。
(112) 松浦章「琉球『白姓官話』成立の背景」（『清代琉球中国交渉史の研究』関西大学出版部、2011年）。
(113) 松浦章「朝鮮国漂着中国船の筆談記録にみる諸相」（『関西大学東西学術研究所紀要』47輯、2014年）。
(114) 岑玲『清代中国漂着琉球民間船の研究』（榕樹書林、2015年）。

もに[115]、中国商船の琉球漂流事例から、中国商人の活動の実態を論じ[116]、日本に漂着した中国船についても、船籍や乗組員の構成などを分析し、清代の航運業の発展と対外貿易について論じている[117]。また兪玉儲は中国漂流民を送還する琉球船による貿易は、琉球にとって朝貢貿易とともに重要な商品輸出ルートとなっていたと指摘するともに[118]、中国に漂着した琉球船の貨物売却状況を分析し、貿易を目的とする偽造漂流の可能性は少ないと結論している[119]。岑玲も清朝の檔案史料により、漂着船の積載貨物とその航運形態を詳細に検討した。[120]

五、今後の展望――結びにかえて――

以上、本稿で紹介したように、明治期以降、日本人の海外漂流記は鎖国時代における貴重な海外情報として関心を集め、満鮮史研究や南洋史研究とも関連して、日本人の海外進出の先駆という観点からも研究が進められた。戦後には、1960年代ごろから、漂流記の実証研究が進展し、さらに1980年代以降は、海域アジア史の活発化とともに、東アジア諸国の漂流民送還体制、漂流民の異国体験、漂流民を通じた文化交流や海外認識などの研究が進められていった。

このほかに漂流民と国内政治問題との関わりについての研究も現れつつある。松尾晋一や吉村雅美は平戸藩に漂着した唐船への対応について、平戸藩と幕府との間に大きな開きがあることを指摘した[121]。また荒武賢一朗は肥後天草への唐船漂着事件への対応を通じて天草諸島の地域的状況や有

(115) 松浦章「清代中琉貿易による中国茶葉の琉球流入」(『清代中国琉球貿易史の研究』榕樹書林、2003年)。
(116) 松浦章「乾隆14年における中国商船の琉球漂流」、「乾隆14年(1749)に琉球国に漂着した中国人」(『清代琉球中国交渉史の研究』関西大学出版部、2011年)。
(117) 松浦章「江戸時代における漂着唐船に関する一・二の資料――得泰船筆語を中心に」(『関西大学東西学術研究所紀要』13号、1980年)。「清代沿海商船の紀州漂着について」(『関西大学東西学術研究所紀要』20号、1987年)。「文政４年「清人漂着譚」――紀州漂着中国商船」(『関西大学東西学術研究所紀要』38号、2005年)。
(118) 兪玉儲「再論清代中国和琉球貿易――謙論中琉互救漂風難民的活動」(『歴史檔案』1995年１期)。
(119) 兪玉儲「清代の琉球船が貿易を目的に漂流したことについての私見」(『第４回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』沖縄県教育委員会、1999年)。
(120) 岑玲前掲『清代中国漂着琉球民間船の研究』。

力商人と長崎奉行所との関係を解明している[122]。中国や朝鮮における漂着事件に関しては、同様の視角から国内政治問題との関連を検討することが可能であろう。

また、明清交替期の漂流民送還問題も興味ある問題である。劉序楓は清朝が台湾を征服する以前の、清朝と鄭氏政権による日本人漂流民に対する救助と送還について略述し[123]、孫衛国は鄭氏政権下の商人が朝鮮に漂着した事件を通じて、朝鮮が明・清に対して異なった態度を取っていたことを明らかにした[124]。ただし明清交代期における東アジア諸地域間の漂流民送還について総合的に論じた研究はなく、東アジア海域の秩序が大きく動揺するなかで、漂流民がどのように処置されたのかという問題は、史料的には困難もあるものの、重要な課題となると思われる。

また漂流民を通じた文化交流や海外認識についても多くの研究の蓄積があるが、多くは日中、日朝など二国間の文化交流と相互認識に関する事例研究であり、東アジア諸地域における漂流民に対する対応や、漂流民を通じた海外情報の収集などを比較検討して、総合的に論じた研究は少ない。このような東アジアにおける漂流民問題の全体的状況や長期的変容について、各国の漂流記を利用した研究が進展することが期待される。

(121) 松尾晋一「正徳・享保期不法漂流唐船問題への大名家の対処」(『東アジア海域における交流の諸相 ── 海賊・漂流・密貿易』九州大学21世紀COEプログラム（人文科学)、2005年)。吉村雅美『近世日本の対外関係と地域意識』(清文堂，2012年)。

(122) 荒武賢一朗「近世天草への唐船漂着と西海地域 ── 石本家文書を中心に」(『磁器流通と西海地域』関西大学文化交渉学教育研究拠点、2011年)。

(123) 劉序楓前掲「清代環中国海域的海難事件研究」。

(124) 孫衛國「義理与現実的衝突 ── 従丁未漂流人事件看朝鮮王朝之尊明貶清文化心態」(『漢学研究通訊』25巻2期、2007年)。